

解らない俳句について

前川敏夫

私は各新聞や雑誌の読者投稿の文芸欄の俳句、短歌、川柳をよく読むし、専門雑誌もよく読む方であると思っている。そんな場合、ついつい短歌や川柳を先に読んで、俳句は後回しにしてしまう。それは短歌や川柳の方が面白いし、よく解るからである。

滑稽俳句を除き、俳句には言葉が難解で解らない、意味が不明だ、どこがいいのか解らないという句が多すぎる。

地下室が無くて鮑の夜明けかな

階段が無くて海鼠の日暮かな

屋上が無くて蜩の真昼かな

この三つの句はいずれも意味不明だが、このうちひとつは蛇笏賞を貰った有名な俳人の代表句といわれており、あとの二つは私とその句にならって勝手に言葉を並べたものである。俳句に苦吟を重ねている私でもこれなら無数にできる。

時代の最先端を行く芸術家の作品には我々凡人の理解を超えているものが多い。

例えば二つの目が違う方を見ているピカソの「女」のよさは私にはわからない。
福笑いのようにその顔の陳列を無数に変えて見ても、その違いを指摘できないと断言
できる。

一作品が何億と言う値段で取引され、美術評論家たちに絶賛されているピカソが
わからないのは、芸術的センスのなさを告白するようなものだが、解らないものは
解らないというほかはない。それは高名な作家や評論家たちが絶賛している俳句に
についても変わらない。

昔、ある俳句雑誌で高名な作家が、「プロの作品に何故難解な句が多いのか？」
との質問に次のように答えていたのを記憶する。「誰でも解りやすくして斬新な句を
作りたいのだが、そんな句はおいそれとできるものではなく、つい月並や類想に陥
ってしまう。そんな非難を避けるため難解な句に逃げるのです。」と。

むかし虚子は無季俳句や新興俳句のことを「病菌」のようだといいすぐに「消滅」
するものだといったが、おおむねその予言は的中した。 芸術というものは、大衆
に媚びているばかりでは進歩がなく時代を牽引する前衛が不可欠だが、それが本当
に前衛であるかどうかは、時代の経緯をまたねばならない。虚子の予言のように死
滅しているものも又多いのではなからうか？

「この句が解らない人と俳句を語りたくない」といかにも自分が抜きんでた感覚の
持ち主のような言い方をする評論家よりも、もっと危険なのはそれに迎合すること
である。審美眼などというものは人それぞれにみんな違う。選者によって入選句が
大きく違い、句会の互選などでもそれは経験することである。その違いを理解した
うえで、自分の感性を信じるほかはない。

凡人である我々でも、いや凡人であるからこそ裸の王様」になることだけは避けた
いと思うのである。